

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

「愛する人の側そばに生まれ変わりたい」

皇の身代わりとして佐渡島に流された日野資朝は、都から佐渡まで会いに来てくれた息子に会うこと

「その男ゾルバ」という映画がありました。亡父が残した炭鉱を再開するためにクレタ島に渡るイギリス人の作家が炭鉱夫ゾルバと出会います。大切な人が亡くなったときに鉱夫ゾルバは「人はなぜ死ぬんだ」と作家に尋ねますが、作家は「わからない」と答える。ゾルバは「本とは何だ。本は何を教えるんだ」と食らいつきます。

鎌倉時代末期、後醍醐天皇の身代わりとして佐渡島に流された日野資朝は、都から佐渡まで会いに来てくれた息子に会うこと

が許されない。処刑の日も近い。毎日、泣き暮らしますが、いよいよ処刑という日、資朝は「綿密の工夫」をします。綿密の工夫とは、鎌倉時代に武士や貴族に流行した宗教である禅です。そして、刑場に引き出される彼には少しの臆する気色もなかったと『太平記』に書かれています。

ゾルバのボスである作家が読む本は死の意味を教えませんでした。資朝にとっての宗教には死への認識を変える力がありました。

そして、阿弥陀寺さんのご宗旨（浄土真宗）では「お念仏を唱えた人は、極楽（浄土）に往生できる」といわれています。太平洋戦争が終わって

「死」から遠ざかっていた日本人ですが、一昨年から始まったコロナ騒動で死がまた突然に身近になりました。高齢者が重篤化しやすいといわれていたコロナも、新型に変異してからは若者の方が重篤しやすいものになりました。

また、熊本地震でも多くの方が犠牲になりました。その前には東日本大震災も起こりました。この数年、死というものがある突然目の前に迫ってきたのです。

いま流行している新型コロナウイルスは、ころころと変化するのが特徴です。本当にワクチンだけで安心なのか。あるいはワクチンも効かない変異株が出現するの。これからのうなるのか、まったくわかりません。

昭和三十一年生まれである私にとって、太平洋戦争はまだまだ身近な出来事でした。街には傷痍軍人の方たちがいましたし、父も伯父たちも出

征しました。浅草に住んでいた母からは東京大空襲の話もよく聞きました。祖母はほぼ毎晩、私たちに戦争の話、特に亡くなった伯父の話をよくしてくれました。

伯父の命日は昭和二十年八月十三日、終戦の二日前です。享年二十三歳。若いですね。

最終的な死というのも残念ですが、その亡くなり方も残念でした。あ、ちなみに「残念」というのは「念いが残る」というのが本来の意味です。

戦地での死亡なので、一応「戦死」ということになっていますが、本当は電車から落ちて亡くなったようなのです。それで祖母は、「うちの家系はおつちよこちよいが多いから注意するんだよ」と、よく話していました。

そんな人から親鸞聖人はどのようにお答えになるのでしょうか。

お浄土から一時帰省をしている亡き人も楽しくそれを聞いているでしょう。

しかし、お盆だけでは満足できず「ずっと愛する人のそばにいたい」という人もいます。

中には「いやいや、極楽浄土に往生するよりも好きな人の近くに生まれ変わりたいんだ」という罰当たりな方もいるかもしれません。せつかくお迎えくださる阿弥陀様にも申し訳ありませんが、それも人情といえは人情です。

そんな人から親鸞聖人は

どのようにお答えになるのでしょうか。

お浄土から一時帰省をしている亡き人も楽しくそれを聞いているでしょう。

御和讃を読んでみましょう。
 弥陀の回向成就して
 往相還相ふたつなり
 これらの回向に
 よりてこそ
 心行ともに
 えしむなれ

阿弥陀様の本願によつて、私たちが浄土（極楽）

還相回向

に往生するということは、みなさんもよくお聞きになられていると思います。それがここに書かれる「往相」の回向です。

往相の「往」は行く。汚れたこの世から、清らかな浄土に行くこと。そして「相」とは姿です。ただ、イメージとして極楽浄土に行くのではなく、私たちの姿のままに極楽浄土に「往」って「生」

きる、それが往生です。しかし、この御和讃にはもうひとつ「還相」が詠われています。還相の「還」は「還る」ことです。浄土に往生した人が、ふたたびこの世に帰って来ることを「還相」といいます。

むろん、これは誰にでもできるわけではありません。が、誰にでもできることでもあります。

修行が必要

この「還相回向」を最初に述べたのは中国で浄土教を始めた曇鸞和尚です。曇鸞和尚によれば

「還相」することができるとは、まずは浄土に往生する必要がある。地獄に行った人は還相できないし、成仏しなかった人も還相できないのです。

そして、私たちが浄土に往生するにはお念仏を唱えればよい。

ですから、これは誰にでもできるといえれば誰にでもできます。皆さまのように阿弥陀寺にいらっしやうと、一度でも「南無阿弥陀仏」と唱えたことのある方ならば往生への道のりは約束されているようなものです。

さて、じゃあ、極楽往生すれば誰でもこの世に戻って来れるかというと、もうひとつ手間が必要になります。

それが「奢摩他・毘婆舍那・方便力」を成就させることです。

「奢摩他」というのは「止」とか「禪定」など訳されることもある修行のひとつで、波立つ心を澄ませて鏡のような状態にします。この状態にな

れば、「心頭滅却すれば火もまた涼し」。体中が炎に包まれても涼しく感じる瞑想の一種です。「毘婆舍那」というのは、「観」と訳されるもので、深い智慧で世の中のことを観察することを言います。「あいつはひどい奴だ」と思う人が、他の人からは好かれたりする。私たちは人や事象を観るときに、自分の色眼鏡で観ています。それを外して、あるがまま観察するのが毘婆舍那です。

さて、最後の「方便力」とは「ウソも方便」というときの、あの方便です。仏教の教えは深遠で、私たち凡人は理解をすることがなかなか難しい。それをさまざまなたとえや時にはウソと思われるような言葉を使って、私たちにわかりやすく説いてくださる、それが方便です。いま目の前にいる人ひとりひとりにぴったりあつた言葉や方法、あるいはお姿で臨機応変に説いてくださる、そのような智慧の働きを方便力と

いいいます。この三つを究めようというのが禅宗です。しかし、出家したお坊さんが一生かけてもなかなか成就できません。

極楽ならば誰でもできる

「そんな修行なんてできるはずないよ」そう思われるでしょう。ところが大丈夫なのです。この世でそのような修行が難しいのはさまざまに誘惑があるからです。心を集中させようとする

と、台所からおいしそうな匂いが漂ってくる。その誘惑を断ち切ろうとすると、その行為が「執着」になる。

何ものにも捉われない清らかな智慧で物事を観察しようとしても、子どもの頃から沁みついてきた好悪の感情をどうすることもできない。ゴキブリを愛せよといわれてもムリ！強面のゴツイ男子よりはイケメン男子の方がいい人に見えてしまう。それより何より坐禅なん

かしていたら、足は痛いわ、眠くはなるわ。身体の誘惑だつてすごいのがこの世です。こんな誘惑だらけの世の中で修行を成就するなんて、よほどの人でなければ無理です。ところが浄土というのは、誰でも修行ができるように作られている世界です。奢摩他だつて、毘婆舍那だつて、方便力だつて、しようと思えば成就できるのです。

利他が大切

ただ、ここにひとつ修行のために必要なことがあります。それも親鸞聖人がおっしゃっています。還相の利益は利他の正意を顕すなり

「還相」というのは、ただこの人のところに還って来たい！というわがままではいけません。「利他」が必要です。

利他というのは利己の反対。「俺が、俺が」というのが利己主義ですね。利他というのは、自分以外の誰かの利益のために

働くことをいいます。ですから「この世に生まれ変わって、憎いあいつに復讐してやる」という気持ちでは成仏できません。

浄土真宗如来寺のご住職の釈徹宗先生から伺ったお話ですが、ある高僧の方は「わしはこの寺の犬に生まれ変わって、変な奴が寺に来たら噛みついてやる」とおっしゃっていたそうです。

そして、これを実現されたのが菩薩様です。観音様は三十三の姿で私たちの目の前に現れるといいますが、仏様の姿で現れることもあれば、お坊さんの姿で現れることもある。優しい異性の姿で現れることもあれば、可愛い子どもの姿の時もある。時には試練を与えるために武器を持った怖い姿で現れることもあります。

ひよつとしたら、いま目の前にいる憎いあいつも、あなたに功德を積ませるために現れた、亡きお父さま、お母さまかもしれませぬ。